

主論文の要約

中国におけるデューイ教育思想の受容とその変遷

劉 勝男

本論文は、20世紀の中国におけるデューイ教育思想の受容と変遷について考察したものであり、全部で七章から構成されている。

序章は三節から構成されている。第一節では、主に本論文の目的について説明した。すなわち、中国人学者によるデューイ教育思想の受容と変遷について考察することによって、現代の中国教育思想界がいかに西洋教育理論を受け入れたのかについて分析した。第二節では、中国国内と国外の先行研究について考察した。具体的には、中国国内では、20世紀初期中国教育におけるデューイ研究の傾向、1950年代中国におけるデューイ研究と1980年代以降の中国におけるデューイ研究の動向について分析した。また、中国国外では、アメリカと日本における中国教育とデューイ教育思想に関する先行研究を考察した。第三節では、研究方法と本論文の構成について紹介した。

第一章では、デューイと彼の教育思想の特徴について検討した。第一節では、デューイの教育思想の根源について考察した。第二節では、デューイが20世紀における世界の教育にどのような影響を与えたのかについてした。具体的には、世界各地におけるデューイ教育思想の普及状況を調べるとともに、デューイ教育思想が進歩主義教育運動にどのような影響をあたえたのかを考察した。

第二章では、中国におけるデューイについて考察した。第一節では、中国でのデューイ教育思想がたどった変遷、すなわち、デューイの訪中過程について検討した。第二節では、デューイ教育思想が1920年代の中国で流行した原因について考察した。第三節では、「デューイ熱」が冷めた後の中国とデューイについて検討した。

第三章から第五章までは、一世紀の間に中国において行われたデューイ研究を振り返り、中国人学者によるデューイに対する態度の変化に基づき、三回の高揚期について検討した。

第三章では、近代中国（1912-1949）の教育におけるデューイ教育思想の受容、特に、中国共産党から見たデューイの教育思想の特徴や、中国人デューイ学派によるデューイ教育思想の受容の特徴を中心に考察した。第一節では、中国で普及したデューイ教育思想の主要な理論やテーマについて考察した。具体的には、「学校即社会、教育即生活、および実験的方法」の三点について検討した。第二節では、中国共産党によるデューイ思想の受容について分析した。第三節では、中国におけるデューイ学派の観点から見たデューイの弟子たちの教育思想の特徴について考察した。すなわち、デューイの中国人弟子である胡適、陶行知、郭秉文および蔣夢麟によるデューイ教育思想受容の特徴を検討し、この四人によるデューイ受容の相違点を解明した。第四節では、デューイの弟子である胡適と陶行知の教育思想を取り上げることで、この二人によるデューイ思想受容の特徴を比較検討した。この時期は、中国人学者が主にデューイと彼の学説を「受容し学んだ」時期であった。デューイと彼の教育学説を詳しく理解することのないまま、直面する歴史的課題に取り組み解決するための、中国救国のための方法としてデューイ教育思想を捉えた。この時期のデ

ューイ研究は主にデューイ教育思想を称賛し、学術的な批判はそれほど見られなかった。また、この時期のデューイ研究は主にデューイの民主主義思想と平民教育に集中し、それ以外のデューイの学説に対してはそれほど関心が向けられることはなかった。

第四章では、1950年代の中国におけるデューイ教育思想に対する批判について考察した。第一節では、中国創立当初におけるアメリカ教育とデューイの実用主義に対する批判について考察した曹孚によるデューイへの批判に焦点を当てて考察した。第二節では、1950年代後半におけるデューイと実用主義教育思想への全面的批判について検討した。具体的には、実用主義の哲学、実用主義の経験論、実用主義の教授学習論とカリキュラム論に対する批判を中心に考察した。第三節では、1950年代後半の中国における実用主義教育思想に対する批判に関する反省と評価を取り上げて考察した。特に、曹孚と陳友松の自己反省と評価、および曹孚のデューイ批判について検討した。第四節では、実用主義教育思想批判の動機・目的・その合理性と、実用主義教育思想批判の特徴・影響・限定性について考察した。この時期、中国の学者たちはデューイ教育思想を批判した。最初はデューイの教育思想を学術的な観点から批判する傾向が強かったが、その後の批判としてよく見られたのは、学術的な批判ではなく、デューイ個人への批判・非難であった。この時期の中国におけるデューイ研究は、学術的論理的な根拠なくデューイを批判する時期であったといえよう。

第五章では、1977年以降の改革開放期の中国教育とデューイ教育思想と関連性について考察した。第一節、二節、三節では「デューイについての再評価」の要因、過程、および中国教育に与えた影響について考察し、第四節で、近年の中国教育学におけるデューイ研究の状況を分析した。この時期には、中国人学者はデューイに対する再評価や再学習を行った。この時期は、改革開放政策の影響によって、以前の教育学説をもう一度事実に基づいて学問的に検証し直す時期であったといえる。デューイの教育思想に対する再評価が行われ、デューイの数多くの著書が中国語に翻訳され、研究論文の数も増えた。デューイの再評価は、1950年代におけるデューイ批判と彼の教育思想や学説に対する不適切な評価を修正することから始まった。この時期のデューイ研究はこれまでになく多岐にわたるようになり、また、分析も詳細になっていった。デューイに関する研究書が多く出版され、さらに、大学院における修士論文や博士論文でデューイ研究をテーマとして取り上げる大学院生たちも増えている。

以上の考察に基づいて、中国におけるデューイ研究に関する三回の高揚期のいくつかの特徴を指摘することができる。第一に、デューイ教育思想に関する研究は、それぞれ時期の教育学研究のなかでも最も重視されていた研究であることが明らかになった。なぜなら、各時期において発表された論文数を調べてみてわかったことは、デューイ教育思想についての論文が最も多く出版されていたことであった。

第二に、中国は中央集権国家であるため、それぞれの時期において、国家政策がデューイ研究に大きな影響を与えることになった。各時期における中国人学者たちのデューイに対する学術的な態度も、国家政策の変化・変更に応じて転換した。その結果として、デューイの哲学・教育思想体系が理解されないまま、誤った見解や批判がしばしば現れること

となった。1920年代の中国においては、デューイの原著はそれほど多く翻訳されなかったため、より客観的かつ詳細にデューイ教育思想を理解することは困難であったと考えられる。したがって、1980年代後半に入ると、デューイの思想についての再評価が始まるとともに、デューイの原著が数多く翻訳されることになった。

終章は、本論文の総括であり、一世紀以上にわたる中国教育における「デューイ研究」に対する反省についてまとめた。結論として、「デューイ研究」は中国教育政策の転換に伴って変化してきたが、この歴史的変遷から学ぶことによって、現代中国においても中国的な文化や精神を反映した教育を建設するさいの試金石とすべきであることを提唱した。また、今後の課題として、中国・日本・アメリカにおけるデューイ研究の比較の視点とジェンダーの視点などの必要性を主張した。